

パネル

産する行為にほかならず、それへの批判として他者の宗教(的)哲学が立ち上がってきたはずだからである。そのため、他者の宗教(的)哲学は、「哲学にとつての他者」という指標のもと、宗教と呼ばれる領域の内外に多様にまたがる類似事象を包摂させた異種混交的なもの、として理解すべきである。

しかし、現代の他者の宗教(的)哲学における他者には偏りがある。動植物、亡霊、死者、さらには事物まで、定義上、他者概念は拡張されうるはずである。むしろ、超越と呼ばれていた垂直運動、そしてその多様な類似経験を「上の方」ではなく「他の方」へ向かつて、その多様性を維持しつつ再記述していくことが求められている。思惟の内部に多なる他性／他なる多性を切り開くこうした試みは、近代に生まれ二重運動の中で形成されてきた宗教哲学の、現代における一つの産物なのである。

パネルの主旨とまとめ

堀 雅彦

近年、「宗教」概念の歴史的形成過程についての研究が充実を見せるにつれ、宗教に固有の「本質」なるものを想定することは、もはや現実的にも理念的にも妥当性を持たないのではないか、との疑念が広く共有されるに至っている。このような状況において、少なくとも従来は宗教の本質を説明することを自

らの存在意義としてきた宗教哲学は、現在どのような思考の営みとして存在するのか。本パネルでは、この問いを、一方では宗教哲学の過去を現在の視点から振り返りつつ、また、他方ではその現在に予感されている未来の可能性を展望するという、二つの方向において考察した。

まず、堀は本質論を「強い意味での本質」論と「弱い意味での本質」論とに分け、現在、前者の説得力は著しく低下しているものの、後者を完全に離れることは困難であり、むしろそれを離れないことの自覚に立ち、錯綜する複数の類似性のいずれかに「投票する」ことの実践的意味を積極的に捉えなおすことが必要だ、との見解を提示した。

小柳氏は、オットーに対するトレルチの批判に注目し、両者の「本質」理解が歴史性への配慮の濃淡という点で差異を有することを明らかにした。特に、「本質規定は本質形成である」というトレルチの言葉に示されるとおり、彼の本質論が決して没歴史的な議論ではなく、むしろ固有の歴史状況への応答という側面への峻厳な自覚に立つものであったことに、改めて注目すべきであると氏は述べた。

松野氏は、神経科学の知見を宗教哲学に導入する一つの可能性を提示した。特に、近年大きな話題になっている、「意思に先行して脳が活動している」というリベットの報告が自由意志や靈魂の問題にどのような帰結をもたらすかを考察した上で、その帰結の唯物論的傾きが必ずしも宗教の否定に直結しないことを明らかにした。

佐藤氏は、宗教哲学が成立期から抱え込んだ二重の遠心運動

(宗教からの／哲学からの)に注目し、このような運動性から出てくる「宗教近代／西欧批判」の今日的展開の一例として、現代フランスの「他者の哲学」の動向を描出した。また、そこで語られる「他者」に一定の偏りがあることを指摘し、動植物や死者といった多様な他者を思惟に繰り込む「多なる他性／他なる多性」への視座の可能性を論じた。

これらの発表を受け、コメンテータの深澤英隆氏は、まず、反本質論が形而上学批判と「文化／政治的」批判という二つの文脈をもつことへの注目を喚起しつつ、宗教研究における反本質論が必ずしも哲学的・科学論的に十分なレベルにない中、本パネルがこれを哲学的観点から取り上げたことには大きな意義がある、との評価を示された。各発題に対しては、次のような疑問が呈された。(堀に対して)「弱い本質論」の例としたヒックやジェイムズの議論には、なお、ある種の強さが内在していないか。(小柳氏へ)トレルチにおいて、認識枠組みの歴史的制約への意識と、ある視座へのコミットメントはどのように調整されているのか。(松野氏へ)例えば靈魂の存在を前提にするのが宗教だ、と論ずる点において、ある種の本質論に組していないか。(佐藤氏へ)脱超越化し、また脱哲学化しつつある「他者」をめぐる思想群を、なお「宗教哲学」と呼ぶのはなぜか。

また、当日は予想をはるかに越える観客が集まり、フロアとの議論は非常に活気のあるものとなった。紙幅の関係上、その内容をここに記すことはできないが、全体としては本質論／反本質論の単純な二項対置が成立しないことが改めて浮き彫りに

なるような議論だったと言える。終了後も議論の熱は冷めず、残された問題の大きさを実感するとともに、開かれた対話・討論としての宗教哲学の更なる可能性を感じた次第である。